

貨車の中でのインタビュー 強制移住の思い出 1. 2004.06.08 取材

サイディー・ムサハーノフ(74歳) チェチエン人、守衛 アルマトゥ在住、

聞き手 前半 岡田一男 用語：ロシア語 後半 ザーラ・イマーエワ 用語：チェチエン語

我々の家には、20kgほどのトウモロコシの粉の備蓄があった。家を追い出されたのは明け方の5時だった。我々には、信じられなかったのだよ、強制移住なんて。だから、強制移住の噂は、流言だと気にも留めていなかった。うちらは、親戚も父親も、兄弟3人も、多くのものが国を守ろうと戦線に行っていた。何も悪いことなんかしていなかった。その朝は、大粒の雪が降っていて、あっという間にひざ近くまで積もってきた。我が家には兵隊が二人でやって来た。5時ごろだった。家の壁には大きな時計が掛かっていたのを覚えている。一人は自動小銃を構え、もう一人は、「ナガン」(ナガン式リボルバー拳銃)で武装していた。

彼らが言うに、「大急ぎで支度しろ。お前らは移送されるんだ。」どこへとは言わず、「移送だ。大急ぎで！」と言うだけさ。驚いた母さんは、「長持ち」の方へ飛んでいった。昔は、何でも大切なものは、大きな木製の長持ちに入れていたものなのだよ。お母さんは、指輪だの、帯だとか、花嫁衣裳だとかを、そこにしまっていた。そこへお母さんが駆け寄ったら、兵隊が自動小銃を、彼女の脇腹に力いっぱい突きつけた。驚いた彼女は、悲鳴を上げて跳び退いた。僕は、そのころ10歳だったけど、壁の絨毯に掛けられていた父さんの短剣の方に跳んで行こうとした。でも母さんに銃を突きつけていた兵隊に殴り飛ばされた。兵隊はその短剣を自分の長靴に入れていた。母さんは、呆然として何も支度を出来なかった。僕は、緑色の運動靴、底がゴムの奴を履いたままだった。上は短いズボンに、半そでのシャツのままだったよ。膝まで雪が積もっているって言うのに。兵隊の一人が家に残り、僕たちはもう一人の兵隊に外に連れ出された。広場中、あちらからも、こちらからも人々が追い立てられていた。広場の中央には白いシューバ(外套)を着た指揮官の大佐が立っていて、彼が兵隊たちを「早くしろ、早くしろ！」とせきたてていた。

うちの村には、女性のデプタート(代議員)がいた。デプタートって判るかね?市ソビエト(議会)の代議員だよ。彼女は僕らを見て驚いた。「どういうことなの?子どもたちが何も暖かいものを着てないじゃない、すぐに凍えてしまうよ」と。母さんは、自動小銃を突きつけられてと、わき腹を見せて、びっくりして何も支度ができなかったと訴えた。代議員の女性は、何か証明書は持っているかと聞いた。母さんは手提げに入れてあった税金免除証明書を見せた。家の男たちが兵役についていると、村ソビエトでは税金をとらなかったんだ。代議員は大佐のところへ行って、証明書を見せながら訴えた。「大佐!私は市ソビエトの代議員です。ご覧のとおり、この

子たちはこの寒さに裸同然です。この一家のことは、私は良く知っています。この一家の男たちはみんな戦線に行って戦っているんです。何人かは、共産党員で、みんな自ら戦線行きを志願していった人々です。何とかしてくださいよ。」と。その大佐は、そばの兵隊を呼んだ。「ムーヒン軍曹！」と呼んでいたのを今もはっきり覚えている。「こっちへ」と呼ばれて軍曹が近づいてきて敬礼をすると、「この親子は裏庭を抜けて家へ連れ戻せ、何か持ってこられるものがあつたら、持って来いと。」

家へ戻ると、もう長持ちはひっくり返されていた。指輪みたいな高価な品々はもう無くなっていて、兵隊がまさに粉の袋を担ぎ出そうとしていた。母さんは、夫も兄弟3人もみんな軍務についているのだと、手まねと片言のロシア語で、ようやく説明した。それに同情したのか、軍曹は粉を取り上げ、自分で担ぎ、母さんは、暖かい着物をかき集め、僕は急ぎで服を着替え、靴を履き替えた。まあ、証明書があつたおかげで助かった訳だ。

外へでると雪は、もっと酷くなっていた。広場で1時間半も待ったかなあ。スチュード・ベーカー型の大型トラックがやってきた。戦時供与品のアメリカ車で、トルコやイランで陸揚げされてグルジア経由で運ばれてきた、しっかりした幌のついた凄く立派な車だった。兵隊たちが小さな子どもたちをトラックの荷台に放り上げたが、僕はもう10歳だったから、自分で攀じ登った。トラックに沢山の荷物を持った人間がすし詰めになされた。男たちは別にされて夕方まで待たされた。我われの村は(グロズヌイの)町のそばにあつたんだが、その郊外のアルドゥイ村の貨物駅に連れて行かれた。そこで貨車に乗り込むよう急ぎ立てられた。貨車の中には柵が取り付けられていた。そこへみんな詰め込まれて、そして貨物列車は動き始めたんだ。

列車が動き出したのは、お昼過ぎだった。まもなくグロズヌイの中央駅で列車は止まった。多分10分かそこらだと思うが、軍用列車とすれ違うためだった。広場にはロシア人だったのか、他の民族の人間だったか、はっきりしなかったが軍人が沢山いて、ロシアの音楽を演奏して、踊っていた。彼らは我々のほうに向かって手を突き出し、(親指を人差し指と中指の間に差し込んで)侮辱して見せた。彼らは飢えていたから、我々がトウモロコシを残して立ち去るのを喜んでいて。兵隊たちは本当に飢えていた。その連中が、派兵されてきたとき、チェチェン人は、食物をやって、養ってやったのだがね。我々のところは、ドイツ軍に占領されていなかった。カバルディノ・バルカリアも、オセチアも、スタプロポリ州も、クラスノダル州もドイツ軍に占領されていたけれども、チェチェン・イングーシ共和国にはドイツ軍は入ってこなかった。

我々の貨車には一人、共産党員で共産党地区委員会の勤務員が混じっていた。彼は病気がちな人なので軍務には

就かず、地区委員会の指導員をやっていた。彼は、怒って、その他人の不幸を喜んで、歌ったり、踊ったりの手
句、手を差し出して侮辱している連中に向かって、貨車の天井際の小窓の隙間から - ガラスが貼ってはなくて、
替わりに鉄条網が巻き付けられていたんだが - 共産党員証を、「畜生、こんなものは、お前らにくれてやる。」と、
投げつけた。

さて、移住させられて、多くのものが死んだり、殺されたりした後、生き残ったものが少し落ち着くと長老たち
が彼を呼びつけた。たしか11月頃だったと思うんだが、「お前さん共産党員だろ。捨てちまった党員証無くした
ってグローズヌイに届け出てみるよ。もしかしたら、共産党の地区委員会か州委員会に届けられているかも知れ
ないから。こっちの共産党の集会に出て、あいつら、どんなことチェチェン人について話しているのか、聞いて
きてくれないか？」それで、彼は実際に届けをだしたのだ。そうしたら、6ヶ月後に窓から投げ捨てた党員証が
送られてきた。それで彼は、地区委員会だか、なにか共産党の集会へ様子を探りに行った。長老たちが、「どう
だった？」と聞くと、「いや、何も話題にはなっていない」ということだった。実際に、非常に厳しく統制され
ていたからね。

軍守備隊の統制と言うのは厳しくて、居住地から5km以上離れることを禁じられていた。パスポート(国内身分
証明書)は渡されなかった。15歳以上の人間には、(特別移住者専用の身分証)登録証が発行されたけど、毎月
15日には、地区守備隊本部に出頭して、居住地にいることを証明しなければならなかった。二人で話していても、
三人目がやってきたら警戒したよ。誰それが死んでるのを見たとか、良からぬ噂を流しているとか密告されかね
ないから。ソ連の体制を批判するとか、誰それを銃殺するのを見たなどと言ったら、それこそ、それだけで下手
すりゃ銃殺、収監され、強制労働に回された。

我々のところには守備隊本部から命令書が出されていた。人民経済部議長モロトフと、書記のチャダーエフが署
名した文書だが、5km以上離れた隣村に許可無く行ったものは、100ルーブルの罰金と10日間の禁固、3回それ
を繰り返したら5年の懲役刑だと。アルマアタ州から隣のタルドイ・クルガン州まで行ったら、裁判抜きで即決
懲役25年だと。どうしても行きたい用事があって申請しても、許可が出なかったことがよくあったね。・・・

貨車の中でのインタビュー 強制移住の思い出 2. ザーラ・イマーエフによる

貨車の中には2週間いたと言うことだけど、その思い出を話して。

貨車の中は、奥の方に棚があって、主に子供たちが棚の上にあった。上の方に小さな窓があったけど、鉄条網が巻き付けられていた。その窓や、壁の隙間から必死に外を見ようとした。何処へ連れて行かれるのか、全然判らなかったが、子供たちは外の様子を大人に話して聞かせていた。数日目に、外を覗いていた大人の人が、アストラハニを通過したと言った。その人が前に行ったことがある所なので判ったのだ。また数日してウラリスクを通過した時は猛吹雪だった。寒かったが、車内を暖めるコンロは一切無かった。女の人たちはトウモロコシの粉を水に溶いて食べ物にしたが、大人たちは自分たちが食べるのを我慢して、子供たちに与えていた。

貨車には何家族くらい乗っていたの？

人だらけで何人いたことか？何しろ誰も横になれなかった。ウラリスクで停まったとき、ドアが開かれて、「死人はでたか？」と聞かれた。

9歳の男の子が2日目に死んでいた。貨車に載せられる前から病気だった子だ。両親は死体を引き渡したくなかったんだけど、老人が、何処まで連れて行かれるのか、何日かかるかも判らない中で、死体が腐乱したら、腐臭で生きている者まで苦しむことになるからと、死体を引き渡すことに決めた。貨車から5m以上離れることは禁じられていたから、死体を白いシートに包んで、線路際においた。

どちらの側のドアが開いたの？

片方だけで、反対側は閉じられたままだった。

しょっちゅう開けてくれた？

いや。大きな錠前がかけられていた。ウラリスクでは、吹雪だった。長いこと停車してたけど、死体を包んだシートが風で煽られて男の子の死体は体が剥き出しになってしまった。両親は棚に上って鉄条網で巻かれた窓からずっと子供の死体を見ていた。

列車が発車する前に、護送兵が水をくれた。車の中には、共産党の地区委員会に勤めていた人がいた。病気持ちで前線には従軍できなかった人だった。彼はロシア語が出来たので、みんな喉がカラカラだと訴えた。バケツがあったら出せと言われて、そのバケツに水を入れてもらった。

次の停車地まで3日3晩かかった。その時には沢山の死体が線路際に捨てられているのを見たけれど、何故か殆どが女の人だった。

あなたの貨車から出た死人？

自分たちの列車は、最初の列車だったが、前の方の貨車から出た死体だと思った。自分たちの貨車の中で死んだのは4-5人だった。若い女の子が腎臓の発作で死んだ。女の人たちが沢山死んだのは、トイレになかなか行けなくて、膀胱が破裂したためだと後で聞いた。我々の社会ではとても作法が厳しいから、女の子たちは恥ずかしくて、我慢に我慢を重ねてその末、苦しんで死んでいったんだ。

どんな風に死体は置かれていましたか？

遠くには持って行けなかった。それで線路際に並べられていた。死体は、自分たちの貨車より前3両から出たものだった。後から聞いたことには、どの列車でも埋葬はできず、死体は犬猫に食い荒らされるにまかされたんだ。とても寒い季節だった。車が停まって、スープが配られると聞いて、二人の男がバケツを持って行った。大人たちはせめて子供たちに温かいものをもとめて自分たちは食べずに子供たちに食べさせた。スープの上には黒い油脂が浮いていた。でもそれは機械油のようだった。潤滑油だったかもしれない。自分は大丈夫だったが、他の子供たちはみんな下痢をして苦しんだ。

18日もかかってアルマアタに着いた。子供たちが途中で病気になったり、死んだのは、酷いスープのせいだと大人たちみんなが言っていた。自分は強かったのか、助かったがね。道中、沢山の死体を捨てさせられて、何日もまた走ったんだけど、棚の上に女の人たちが上がっていくと、みんなそのまま死んでいったんだ。気が付くと黙って死んでいったことがわかった。沢山の死体が犬猫に食い散らかされるにまかせられたのだ。辛い話だけど、僕は未だ10歳の子供で何もできる訳がなかった。アルマアタで車に積まれて、100km離れたチリク地区に送られた。

その草は何なの？

この草がチェチェン語では、なんと言うのか判らないけど、ウイグル語では「チョク・アミン（にがよもぎ）」と言ってね、これは自分の子供時代の思い出なんだよ。子供の頃、手段農場で働いていたとき、この草を煮てよく食べたものだ。

こんなヒドイ臭いのものをどうやって食べたの？

いいや、良い臭いだよ。コーカサスに戻ったときにも、引き抜いてこの臭いを嗅いで子供時代の思い出にひたっ

たものだ。カザフスタンには沢山生えているけど、コーカサスには少ししか生えていない。

どうやって食べたの？

引き抜いて煮て食べたんだ。この草はヒツジも喜んで食べるよ。この草を見つけるとよろこんだものだ。ただ、この草を食べると歯が真っ黒く染まるんだ。草と水しか食べられないから人々は栄養失調になって体が腫れて酷い容貌になって、死んだり、横になったままだった。人々は体が弱っていて死体を葬ることも出来なかった。それで溝に死体を並べるだけだった。他にどうしようもなかった。死体は犬猫に食い散らかされるままだった。惨状が知れ渡るとようやく町から防疫班がやってきた。農場の議長に伝染病が危険だからと、ちゃんと穴を掘って埋葬しろと命令した。それまでは、移住者が自分で埋葬せざるをえなかった。

私の両親も孤児だったの。おじいさんも、おばあさんもみんな強制移住の時、死んでしまったの。